

●二人で味わう古典和歌(70)

## 時の花いやめづらしもかくしこそ見し明らめめ秋立つごとあきに

大伴家持

季節の花、この花は見れば見るほど心惹かれる。今こに見られるままにずっとご覧になって私どもの願いどおり御心を晴らされることであろう。秋が来るたびごとに、ずっと。

万葉集全二十巻、四五一六首の締めくくりとして巻末に置かれた誰しもが知る新年の祝歌は次の一首。

新あらたしき年の初はつはるめの初春の今日降る雪のいやしけ吉事よきこと  
豊年の瑞兆である雪が降ったこと、一月一日が二十四節気の立春と重なる歳旦立春であること。いくつものおめでたいことが重なった特別な日にふさわしい御代繁栄の言祝ぎの歌である。

しかし掲出の四四八五の歌、かつて家持はこの歌で万葉集二十巻を閉じようとしていたという学説がある。次に続く四四八六の歌以下巻末までの三十一首が、約二十五年度の



歳月を隔てて格別丁寧に整頓された上で加えられたことがわかつているからだ。また同時に、この歌は家持にとって四十歳の節目の感慨がこもる作であった。当時、四十代という年齢は「初老」と呼ばれ人生の大きなひと区切りである。

はじめて一人前の官吏となった二十九歳から、世の中はめまぐるしく変わっていった。この歌を含む一連を詠んだ前年に聖武上皇が崩御し、翌年に橘諸兄が他界。九年前には敬慕していた先太上天皇元正女帝も亡くなっている。我が身を支えてくれた人びとを心に置きながら、佳き輝かしき時代の復活を祈願する一首。万葉集編纂という生涯の仕事の終わりを飾るのに十分だったはずだろう。

けれど、そうはしなかった。それは『万葉集』が個人史を超えた公の、万世の歌集であったからだ。世にもめでたい日における天皇に成り代わった寿歌。巻一卷頭雄略天皇の歌に応え得る賀詞。『万葉集』は家持の私撰歌集ではなく、代々の朝廷の心とおく近く投影した勅撰和歌集の一面を持っているとも言える。

(小島なお)